

第二期 第二十九号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.12.20 定有堂書店 発行

遅れて読む

奈良 敏行

メモ… 文体についてとりとめもなく

ワクサカソウヘイ

車縦走断層紀行 ①

芝野 浩貴

Vカ

ムラカミヒロミ

熱とキャベツとクイーンとライブ

齊藤 仁昭

言葉と場面

うしきのどか

神在

五百川知子

GAUDEAMUS

戸國 航

十一月三日は武道の日

山本千津子

鳥取あれこれ その二十八

内田 克彦

天平の詩魂 (下)

秦阜 梅林

旅とめがねと辛煮

あきの素生

魂のこと

古賀 啓三

熊のはなし

ドラメリア

…… 編集後記



遅れて読む

奈良 敏行

(定有堂 店主)

先日閉店間際に、遠方(滋賀)からおみえになった方と自然な成り行きで雑談となり、「居心地のいい品揃えですね」と好意的な声かけをしていた。売れ筋という外発的な動機付けで、ちぐはぐになって

いなくて、よくも悪くも一人の身の丈の関心での品揃えが、読み取れた、ということのようだった。加えて、「みんな自分で読んだのですか?」と問いかけられた。深い意味ではなかったのだと思うが、少し戸惑った。答えあぐねて、「いえ、いつか読んでみたい本です」と口にした。

すべてがそうだとはいえないが、一部については確かにそうだ。それは以前から自覚していたことだが「いつか読む本」つてどういうこと? と問い返されると、それほど明確には答えられない。

前にある版元の人に、読書の動機づけとして、「わた

したちに対して現れている世界と、本当に存在している世界とが違っているとする考えが気になるかならないか」が入口、と示唆されたことがある。わたしは日頃、「世界」の中において「世界」の外をどうやって知るのだろうか？と自問自答を繰り返す。何かしらの認識上の結節点があったて、それを特異点（シンギュラリティ）とも呼んでいる。その版元のKさんが、この十一月に手紙をくださったて、自社本だけど、『生存する意識』も参考になるかも、と資料を同封してくださった。「植物状態」と診断された患者がいて、その「脳」にアクセスを試み、意識の発火を確認し、「意志」をすくい取り、そして生還に導いたという話だ。現実の認知が改変される。この新しい認知の向こうには、特異点を過ぎるようなものを感じる。

数日前、来訪された朝日出版社のHさんと話をしているて、「結局わたしは『意識』について関心があるのだけど、道筋がわからなくて……」と口にし、「意識？」と問いなおされ、一層自分でも困惑し戸惑った。カフェ「ドロップ」でわたしを読むべき本をノートしていただいた後の、店頭に戻ってからの会話だった。わたしは何を問いたかったのだろうか？少し自分自身に途方に暮れるところを感じ、「音信不通」を振り返ってみた。十五号に「必ず減びるべき生物体のなかに、減びることを肯んじない心が生まれ、しかも心自身がそれを知ってしまった」と

木下清一郎の言葉を記している。この自己言及的な「心」のことを知りたい、と思いつけているようだ。「心」のことを知るには、「心」の特異点を越えた彼方から「心」を振り返る必要がある。「シンギュラリティ」ということばが立ち現れるゆえんだ。

Hさんは、ノートに読むべき小説家のリストを記してくれた。文芸誌は毎月かかさず目を通していているという。「心」の境界を超えて「心」を認知するには、「物語」が不可欠だ、という視点のように理解した。

物語、といわれて、ここしばらく、ケン・リュウの『紙の動物園』と『もののあわれ』（ハヤカワ文庫）にのめり込んでいたのを思い出した。一読し間をおかず再読した。これこそがシンギュラリティを主題とする物語世界だったのだ。ここでは、生身を捨て去り仮想世界へとアップロードする生命を、シンギュラリティと呼んでいた。生を途絶しない連続性が魅惑的だった。

数日後店内の「文庫の森羅万象」と名付けている一角にふと目を留めると『脳はなぜ「心」を作ったのか』（ちくま文庫）があった。どのように自分の心は成り立っているのか？という問いに答える本だ。「心」は実体ではなく神経ネットワークに偏在するシステムの便宜上の名称だというのが結論だ。

月末には国書刊行会の石原将希さんと会ったのだが、

十二時のランチに始まり、カフェへと梯子し、夜九時前まで語りあった。もちろんわたしが質問攻めにしたのだ。

「わたしは何を読めばいいですか？」と。閉店時間を過ぎてなお店内で話し続けたのだが、一角に二人の足が進んだとき、一冊の本を指さして石原さんが言った。「この本知ってますか？『意志』は必要ないというテーマの本です」と。「意志」は心の主体的なあり方の根拠でなく、「欲求」のモジュールが下した決断を後付けで呼んでるだけのもの、という内容で、病を治すように「心」を治療し消去する病院化社会の話だと後で知った。伊藤計劃の『ハーモニー』（ハヤカワ文庫）だった。八年ほど前から店内でも突出して売れている本だった。たしかに「心」がテーマの本だった。わたしが読むべき本の一冊だった。

でもわたしが紐解くのに、石原さんとの出会いを待つて八年の月日を要した。見ても見えない。「いつか読む本」に囲まれていると、「いつか」というその気配はあるのだが、ついに無縁に終わる本がほとんどなのか、とも予感する。仕方ないことだ。

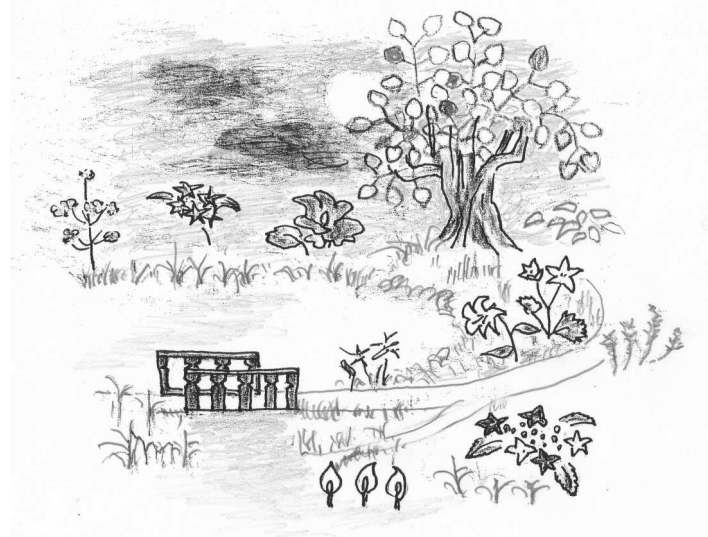
2018. 11. 30

エイドリアン・オーウェン『生存する意識』みすず書房 2018

ケン・リュウ『紙の動物園』ハヤカワ文庫 2017

ケン・リュウ『もののあはれ』ハヤカワ文庫 2017

前野隆司『脳はなぜ「心」を作ったのか』ちくま文庫 2010
伊藤計劃『ハーモニー 新版』ハヤカワ文庫 2014



メモ：文体についてとりとめもなく

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

「書ける時と書けない時の差って、なんですか？」

そう問われて、ドキッとした。過日に開催された「文体について」をテーマとしたトークイベントでのことである。知人の作家に招かれ、私はゲストとして登壇していた。

この質問がその時の私の胸をえぐるものであったのは、この夏、とあるルポの書下ろしを目標枚数の半分もいかぬうちに断念した、という個人的経緯があったからだ。

「書けなかった」という忸怩たる負け試合を絶賛引きずっている最中の身に、この質問はなかなかこたえる。「書ける時と書けない時の差」なんて、こっちが知りたいよ！といった按配である。

だが、呻きながらも何かを喋らなければならないのが、トークショー登壇者に課せられた業である。まるで泡を

吹くようにひねり出した答えが「つまり体優先で書いている時は書いて、頭優先で書いている時は書けない」というものだったのだが、いまになって自分のこの発言を思い返すに、なかなかの得ているじゃないか、と妙に感心したりしている。

「書けない」って、どういう状態なのか。たとえば件の夏に断念した書下ろし、これは「鳥取は近未来都市なのではないか」という題材を扱ったものだったのだが、二万字書いたところで「これは書きたいものではない……」と泣く泣く判断し、編集さんにべ切の先延ばしをお願いした。つまり、文章としては書けているが、「書きたいもの」としては書けていない、ということであり、「書けない」という状態はつまりのつまり「この文体だとどうしてもノレない」ということに等しい。

そう、文体。ノッて書く時に必要なのは、まさしく文体だ。題材を波だとするならば、その波に合わせた文体という名のサーフボードを用意し、波を乗りこなさなければならぬ。私はこの夏、「鳥取は近未来都市……」という波に乗るためのサーフボードをどうしても手に入ることができず、テキストの大海原で溺れ、息も絶え絶えに浜辺へと打ち上げられた。

じゃあ、そのサーフボードはどこで売っているのか。文学ゼミかサロンかそれともライター講座か。いや、ど

こにも売ってない。なぜならそれは「物」ではなく、「体」だからだ。プロサーファー、もしくはプロスキーヤーでもプロテニスプレーヤーでもいいのだが、彼らは商売道具を自分の身体と分離して扱ってはいない。身体の一部と同化させ、世界と対峙している。で、文筆に臨む際に、身体の一部として扱うべきものは万年筆でもPCでもなく、文体だ。つまり文体とは、「体」のことに他ならない。

そういえば、音楽家は自分の出せる音域の範囲内では作曲をすることができないそう。つまりまず体に倣うことで、楽譜が発生するということである。

たとえば、いま私はこの音信不通のコラムをわりかしスラスラと書いているのだが、これは体優先で書けているからだ。一応は頭も「書き出しはこうするか……」とか「全体の構成はこんな感じかな……」などとアシストめいたことはしてくれているが、体はあまりそれを気にせずに文章を進めていて、健康的だ。逆に頭が優先されている時は、やけに秩序やルールばかりを気にしてしまい、ゴリゴリとしたものが生まれる。いわゆるスランプというものは、頭が優先された状態を指すのである。

スランプにハマった時、脱出するコツはいくつかあるが、個人的に重要視しているのは「触感をメモするように書く」ということだ。題材を書いたための文体が得られ

なくてもがいている時は視野狭窄に陥っていて気づきにくいのだが、後から落ちて着いて観察してみると、ハードの部分（構成や筋立て）だけで悩んでいて、肝心のソフトについてはおろそかになっていることが多い。つまり頭でばかり考えている状態で、ネタについての身体的感覚が無視されているのである。こういう時は、まず頭の焦りが過ぎ去るのを待つてから、もう一度題材の手触りを確かめ、メモを取るような感じでそれととりとめもなく書く。そうしてソフトが膨らみだすと、自然とハードは後からついてくる。まず体が先にあつて、それから頭がある。それがどうやら、私たちの「健康」の本質であるらしい。

夏に書けなかった「鳥取は近未来都市……」は、秋にいくつかの習作をきっかけとして、やっと改めて書けるところまでこぎつけた。体が「書かせてくれ」と言っているのがわかる。体の意欲だけが、文体を創ってくれるのだ。

これからまた何度か訪れるかもしれないスランプ時のために、これを書き残しておく。文体についてのとりとめもないメモでした。



車縦走断層紀行

① く紅葉湖・ダム・鉱山く

芝野 浩貴

(地球探究家)

しらかねも こがねもたまも なにせんに
まされるたからこにしかめやも 山上憶良

和歌山城く吉野山く賢島

和歌山城の石垣に関して、秀長の時の緑色片岩の野面積み、関ヶ原後の浅野幸長の時の友ヶ島の和泉砂岩石を加工して接ぐ打ち込みハギ、徳川頼宣の時の熊野の花崗岩で切り込みハギを同時に見れる三角スポットがある。熊野古道には行かずに、断層に従い、真珠の御木本で知られる賢島まで走る。吉野山金峯山寺の銅鳥居は宮島の木、天王寺の石と並んだ三大鳥居である。

桑名く下呂温泉く飛騨高山く越中八尾く富山

伊勢古道沿いに北上し中山道と交差して一気に日本海側へ縦断。途中の七宗町で日本最古の石博物館に寄る。20億年前の石がある。縞状鉄鉱層で判断。酸素が多いと鉄と酸化して沈み、少ないと二酸化ケイ素が沈殿する。石の年輪だ。ウランとトリウムが鉛に変わる半減期で石の年齢を測定。国道41号線のぶり街道を進む。越中八尾の諏訪町石畳通りは日本百選の道。

糸魚川く奥只見湖く喜多方く米沢く尾花沢

山陰く生野銀山く篠山河原町妻入商家群く三宮
日本海由良川から瀬戸内海加古川河口まで険しい山越えすることなく平坦に通行できる本州唯一の道で氷上回廊と呼ばれるところがある。生野峠も分水嶺で、この近くに本州でも低い分水嶺がある。秀吉を牽制する城造りなどが目立つ。生野銀山を訪れ、断層で鉱脈が切れたところなどを確認したが、銀山絵巻に蟻の巣のような鉱脈や製法から幕府に上納するまでのことが描かれており、より当時が偲ばれた。

春、中山道を完歩し、北前船航路を利尻・松前から南下し、西日本豪雨でフオッサマグナ縦断を諦めた。日本の成り立ちを考える時、火山活動を外せないが、その証としての鉱山がある。この秋、佐渡金山・石見銀山に続く鉱脈を求め、ちびたダイヤで。パンクの危機を気にしながら車で列島縦断を敢行した。以下の記録は、ホテル・高速道を使うことなく、一般道・農林道を走り続けた軌跡である。

しか取れないのか？ ユーラシア大陸から分離して東日本は反時計回りに、西日本は時計回りに、そして伊豆半島が南から。オラーユジンというらしいが3方向がぶつかり、火山活動・地震を繰り返す鉾山研究の聖地だ。奇しくも中越地震の14年後に柏崎を通った。奥只見湖に行くまでの道は長いトンネル(20キロ)でシルバラインという。かつての奥只見ダム建設のための工場用機材運搬専用道路だ。黒部の太陽を思い出した。シルバーという命名は、銀山平という鉾山の町だったからだが今は水深百米に沈みダム船着き場の下となっている。銀山温泉も尾花沢鉾山にあるからの命名だが、抗内は土砂崩れによるメインテナンスのため入れなかった。芭蕉は「すずしさを 我が宿にしてねまるなり」という句を尾花沢10日間滞在時に詠んだ

角館く田沢湖く鹿角く大館く弘前

院内銀山を過ぎ角館の武家屋敷に圧倒される。田沢湖の周辺には抱返り溪谷、乳頭温泉など紅葉ならぬブナの木、黄葉狩りのできるところがあり生命感が半端ない。人喰い熊のいるところにも近づくが、この地域にしばしば出てくる人物として菅江真澄がいる。恐山・立山と並ぶ三大地獄の川原毛地獄など菅江が旅した時の図絵が時代考証に役立つ。旅人だが秋田が気に入って29年間住んでいる。尾去沢鉾山は708年開山で金や銅は奈良東大寺の大仏や中尊寺金色堂に使用された。長崎で南蛮貿易に使われた。

白神山地く鱒ヶ沢く十三湖く龍飛岬く恐山

白神山地は菅江真澄の葉草どりの山だった。ダムの下になった村のところで行こうとしたが、土砂崩れで通行止だと知らされ諦める。知床や屋久島の時と同様、ビジターセンターで世界遺産の研究。氷河期から生き残ったアオモリマンテナ。ブナの木は100年から200年の間が最盛期。倒木後4、5年でキノコがつき、200年かけて苔がつく。葉っぱは南に行くほど小さくなる。大きく薄いので枯葉の時カラカラ鳴る。実際、秋田青森に入ったら山道はブナの枯葉で道が埋まり高低差のあるカエデや紅葉やススキの協奏曲の下でイエローロードを走ることになっていた。北前船寄港地の鱒ヶ沢から汽水湖の十三湖を北上し本州最北端の龍飛岬へ。津軽海峡では、対馬海流の7割が太平洋へ抜ける。2万年前北海道と青森は陸続きで、水深120mの平地に青函トンネル作った。陸奥湾に沿って移動し、南直哉住職のいる恐山に着いたのは、山陰を出て13日目の事だった。鉾山を求めて移動した時、鉾石の成り立ちを考えた時、温泉地と近いことが多い。その秘境には紅葉・黄葉もある。恐山は寺の中に湖も紅葉も温泉も硫黄もある。

世間はジャーナリストの自己責任問題で騒がしい。真のジャーナリストの石川文洋さんは、宗谷岬から故郷の沖縄目指して今も歩いている。

Vカ

ムラカミ ヒロミ

〈フライング・ブックマン〉

「Vカ」と言われても、首をかしげる人が大半だろう。中には、「ピンチョンの小説？」という訳知りもいらっしやるかもしれない。いえいえ、それは「V」ですから。

古本好きなら、すぐに「ああ」と頷かれるであろう。

古書業界の「符牒」で、「ビニールカバー」の略語である。

「初」「重」「元パラ」「後帯」「ムレ」など、古書の世界では略語が頻出する。最近のネット書店や、オークションでは段々見かけなくなっているけれど。

元々は、紙目録の時代の習慣と言えるだろう。

目録は、版を組んで印刷する訳で、一行いくらで換算される。勢い、一冊の本のデータに二行も三行も使っていたら掲載点数が減り、儲けが減る。よって、何が何でも一行に収めようとする。一行に二点つつ掲載する強者もある。

そんな次第で、必要最小限の情報を最大限に押し込むた

め、略称を使うようになったのですね。これが、目利きになると「書かれていない」ことまで読むようになる。要するに、箱帯付きで完本の本について、箱も帯も注記されていない時、書かれていないから「ない」と考えるか、善意に解釈して「ある」と考えるか、ということである。古書店側も、それを仕掛けている節がある。阿吽の呼吸というよりも、狐と狸の化かし合いの様相を帯びてくる。

まあ、前述のとおり、ネット上の取引が日常化し、説明不足は即クレームになるせいか、字数をケチるような表記は少なくなりつつある。一方、素人参入が増えたため、肝心の書誌事項（出版社とか出版年とか）の記載がおろそかになってきているようだ。一、二枚の写真だけで全てを判断せよ、というのは少々乱暴ではなからうか。

ま、それは兎も角、ビニールカバーのお話である。

当節の本のカバー（正しくはジャケット、より正確にはダスト・ジャケット）はビニール・コーティングされているため、袖付きのビニールカバーを掛けた出版物は減多に見かけなくなった。ハヤカワのポケミスとSFシリーズの他は、法令集やハンドブックのような実用書に掛かっているのを見るくらいである。

かつては、文芸書や新書などにも随分掛かっていたものだ。

思い出すだけでも、中央公論社、晶文社、早川書房、青土社の本に多く、桃源社の『新サド選集』も元はビニカバ（これも略称）掛けであつたらしい。中公など、箱入りと文庫以外は全部掛かっていたんじゃないかな。

以前のカバー用紙はコーティングされておらず、汚れが付いたら取れず、手擦れが起きやすく、破れやすかつた。為に、ビニールカバーでくるんで保護したのである。新書は、一枚表紙だし、保護目的もさることながら、価格相応の値頃感を演出する目的もあつたろう。岩波はパラフィンだったが、講談社や中公、紀伊国屋やクセジュも厚い薄いの差はあれ、V力掛けであつた。

確かに、店頭で見る限り、きれいである。立ち読みされても、汚れず、帯も外れない。

しかし、何となく違和感がある。紙とビニール、という素材の組み合わせがそぐわない。（ホチキス製函された機械折の箱もそうだし、甚だしきは、終戦直後など、本体そのものがホチキスで綴じられた出版物さえあつた）これが、パラフィン紙やグラシン紙、いや藁半紙だって、これ程の違和感はない。植物から作られた天然素材と、石油から作られた人工素材の違いであろうか。（細かいことを言えば、石油も古代生物の置き土産であるから天

然物だけでも）

しかし、このV力という奴、時が経つにつれてみずばらしくなっていく。

先ず、汚れが溜まりやすい。埃が付いたら、取れなくなる。早いうちなら簡単に払えるが、放置すると固着して、アルコールや溶剤でも難しくなる。手の汗や油脂が残っていると、隣の本と癒着する。相手がコーティングなしのカバーだと悲惨で、引き離す際に印刷表面がこそげ取られてしまう。（コーティングなしのカバー同士でも同様のことが起き得るので要注意）

更に、素材の特性で、温度変化により伸縮する。基本的に伸びることは少なく、縮む一方である。

ソフトカバーの場合、表紙が反り返ってくる、更に進むと、表紙に皺が寄ってくる。取り去らないと、棚に戻せない。

セミ・ハード（河出のモダン・クラシックとか）くらいは平気で曲げてしまうので、V力恐るべしである。ハードカバーは、表紙が強固だから、逆にビニールの方が損壊する。初期は継ぎ目が破れるくらいで済むが、長い年月を経て硬化したものは、「割れる」。ガラスのような破断面になって凶器と化すときもある。V力のVは、刃物の切っ先のようなものである。

熱とキャベツとクイーンとライブ 坪井日記 ⑪

齊藤仁昭

(長崎書店)

連勤とライブが続いたりすると疲れがたまってしまう風邪をひくことがある。晩ごはんを食べながら妻にそろそろ熱が出そうだなと伝えたら、熱いお茶を飲んでおく
と熱がサツと上がっていいよと言うのであまり信じてはいなかったが素直に3杯くらい緑茶を飲んで早めに布団に入った。予感通りに夜中に熱が出てきたがお茶の効果があつたのか眠つてのちたくさん汗をかいたようだったぶんすっきりした。身体を内側から温めるのが効果的だったのかもしれない。さすがマッサージ屋さん（妻の職業はタイの古式マッサージ師）だなと感心した。

すっきりしたもののまだ怠さがあつたので、着替えてからまた寝たり起きたりを繰り返した。明け方だったかに目覚めたときに頭がひんやりしていた。濡れたタオル

でもあててくれているのかしら、ありがたいことでございます
いますと思いいながら妻も寝ているようだしお礼もいわず
またそのまま眠った。

朝になって目が覚めて何とはなしに頭を撫でたら妙な
感触がしたので掴んで見てみたらキャベツが頭に乗って
いたのだった。なぜこんなところにキャベツがあるのか。
料理の途中で看病してくれていたのか？ 熱にうなされて
キャベツを食べようとしていたのか？ 少し混乱した。「布
団にキャベツ落ちてるよ。」と報告したら、キャベツを
頭にかぶせると解熱効果があると仕事仲間に聞いたと言
う妻。ほんとかよ。たしかにひんやりしてたけれど。あ
らためてかぶってみたが確かにほんのり冷たい。だけと
やっぱり効果は眉唾ものじゃないのかな。釈然としな
いがお茶の効果は実感したのでキャベツのことも受け入
れることにした。どこの民間療法なのだろう。近頃は、
気になることをあえてインターネットで検索しないこと
を楽しんでいるので調べていません。

*

11月のライブは一本だけ。東高円寺の UFO CLUB 2つ。
当日の朝にメンバーの杉浦君と『ボヘミアン・ラプソ
ディー』を観に行った。杉浦君は中学・高校時代にクイ

ンが大好きだったらしい。僕はクイーンをちゃんと聴いたことがなかったのだけれど、曲が力強くてきれいだった。杉浦君への影響も聴きとれた。バンドのメンバーの履歴も面白く（みなすごくインテリ）、興味が湧いた。アルバムを順番に聴いてみようと思います。映画館は満席で、僕らよりも一回りくらい年上の人が多かったように思う。

我々のライブは新曲も割とよくできて悪くないライブだったと思う。次は東京でいつできるだろうか。今回はいつもの家への宿泊がNGだったので久しぶりにカプセルホテルに泊まった。最近のカプセルホテルは綺麗ですね。大浴場もベッド快適でのんびりできた。朝イチの飛行機に乗らなくてよいのならばもつとゆつくりしていたかったが出勤せねばならず。職場では品出しを頑張ったが、ライブ翌日はどうしてもレジでぼんやりしてしまう時間があっていけない。

*

ラジオの声がするノックして入ればすぐに消えるの履き替えたブーツに合わせて彼女は形を変えるのはきなれたビートに合わせてただただ身体を揺らすのラジオの声がするノックして入ればすぐに消えるの

笑ってんのか 黙ってんのか 赤いコートはもういない
ラジオの声がするノックして入ればすぐに消えるの
ぱらついたランプをくぐって変わった映画を見に行こう
緩やかなカーブを描いた意識をたどって見に行こう
ラジオの声がするノックして入ればすぐに消えるの
回ってんのか 止まってんのか あのレコードはもういない

ラジオの声がするノックして入ればすぐに消えるの
手慣れた調子で繰り返しいつもの話で眠りたい
真夜中のシーツに潜って見つけたいつもの話で眠りたい
ラジオの声がするノックして入ればすぐに消えるの
回ってんのか 止まってんのか あのレコードはもういない

（ケバブジョンソン「ラジオの声が」作詞：杉浦真寛）

言葉と場面

うしきのどか

(公立鳥取環境大学
環境学部)

前回の投稿では好きなバンドの歌詞について書いた。けれど、ふと私を感じたものが読み手に伝わっているか疑問に思った。私は曲を聞いて思ったことを書いたけれど、読み手には歌詞しか伝わらない。焦るような詰まるような歌い方で、速いテンポなのにゆったりと聞こえる曲で、あの歌詞の意味を文章にしていた。だからいくら私がここで文章にしようともそんな他の要因は伝わらない。そんな当たり前のことをある程度気にして書かないと、たまに地雷を踏んでしまう。

大学内だとある企画をしている。詳しくは1月号にでも書こうと思っているのでそこは置き、とりあえず仲間を集めていたのだ。人づてに協力してもらえそうな人を紹介してもらった。経緯は省くが、私の書いた文章やその送り方が一因となって紹介してもらった人を怒らせてしまったのだ。その後、他の協力者に文章で説明して

もうまく伝わらないし、企画書が分かりづらいと不評だった。

でも直接話すと、いとも簡単に伝わるのだ。こんなことを私はよく経験しているので勝手にその現象を「ネット上コミュニケーション」と呼んでいる。普通「コミュニケーション」はネット上だとよく喋り、現実ではうまく喋れない人を指す。私はその逆でネットというか文章だけだとダメダメなのに、直接話すとみんなに驚かれるぐらい「コミュニケーション」が高い。

電話でもすんなり伝わることを考えると、やはり私は言葉以外のものに助けられているのだろう。対話ということも大きい要因だが、周りの環境が大きく関わっているように感じる。私にとつて時間をかけて文章を推敲するのは好きだけれど、様々な言葉以外のものに助けられて伝えるほうが得意なのだと思う。

今回の経験はいかに自分が言葉以外のものに助けられていたか、痛感させてくれた。好きと得意は違う。相手に何かを伝える文章はかなり下手どころか、誤解や不快な思いさえさせてしまうようだ。文章の改善点がわからないので、喋っているときに何に助けられているか考えてみる。

私にとって一番変化するのは声色だ。電話でも話を通るのもそのためだと思う。同じことを言ってもやる気なげな、けだるげな声や元気はつらつとした声ならば、皮肉にも尊敬の意味も込めることができる。

他にはジェスチャー。ボディランゲージとはよく言ったもので、時には口はもちろん目にも勝って訴えてくるものがある。言語が通じない人と結構これでコミュニケーションが取れてしまう経験は何度もしている。

目も大切だ。ある時ちゃんと人の目をみて話したら「目が怖い」といわれた。無理して合わせるほうが相手も気圧されてしまうようだ。友達なら気にせず喋っているのになぜだろう。そこで友達との会話を振り返ってみると、顔全体を見ているのだ。それで十分顔が前を向くので、実は視線はちよつと外したほうがいいようだ。目を合わせるのは日本人には相性が悪い。

声色、ジェスチャー、目と3つ挙げてみたがどれも文章では応用どころか利用すらできない要因だ。多分これらに頼り切って話しているものだから、文章に起こしてしまふとはつきりと悪い点が浮かび上がってしまうのだろう。会話ならすぐに弁解ができるが文章はそうはいかない。ということは、私は弁解が多いことになるのか。実際、考えてみると自分でもそういう感覚はある。これ

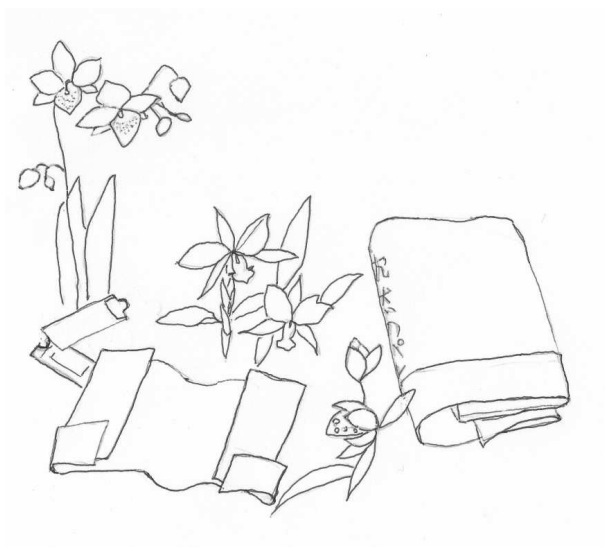
は私が思ったことそのものをすぐに出してしまふからなのかもしれない。

中学校に上がったくらいから私は自分の言葉を慎むということを意識し始めた。ちよつと遅かったのかもしれない。その当時多感な時期とはいえクラスメイトとうまく言った覚えが少ないからだ。自分を包み隠さずに会話するのはまあ、楽だ。ただ、私の性格は聖人君子ではなくて、喜怒哀楽がかなりはつきりして、とても人間らしいと思う。その性格は、人間だからどうしても馬が合わない人もいるが、そういう人たちには伝わりすぎて悪い結果を起こしていたようだ。

最近、直接会話する時には言葉以外を使い立ち回れるようになってきたものの、文章ではまだまだだったようだ。特に文章でやり取りする場合は私の性格を知らない人のほうが多い。そんな時には私の面倒な所が出てしまつたら本当に大変だ。

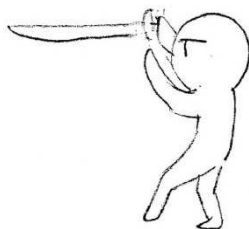
これからのためにも自分の文章上のコミュニケーションを自分で振り返ったり、友達にも聞いて見直してみようと思う。





一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階



神在

神在の出雲の言葉残る旅

油絵に閉ち込められし冬薔薇

綿虫の天使のごとく漂へる

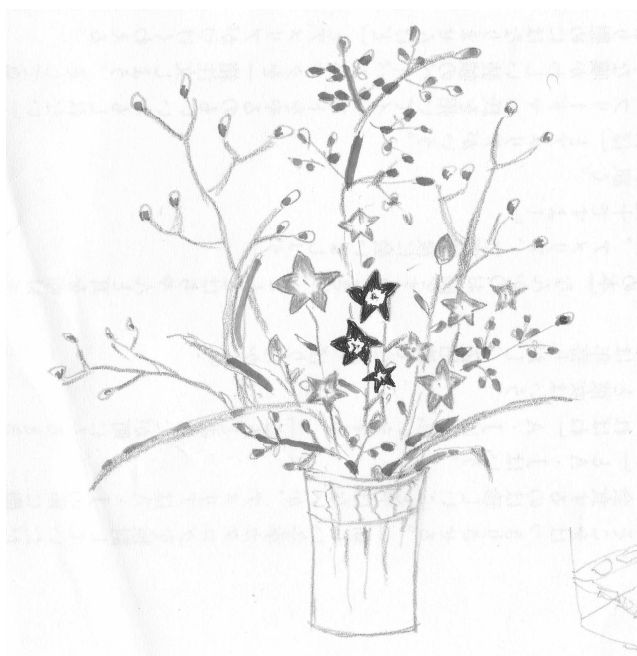
日曜のキャンパスの木々片時雨

マラソンのゴール間近よ冬紅葉



五百川 知子

アシル



GAUDEAMUS

戸國 航

(鳥取西高二年生)

学生共闘時代の勤勉青年たちの苦悩と恋を描いたジブリ作品の『コクリコ坂から』。作中にはガウデアムスという学生たちの自治寮が登場する。学生たちは自由かつ独立した寮を当局の解体から守ろうと奮闘する。一方こちらは現実の話。先日、私は渦中の吉田寮に二泊してきた。ここでも当局と学生たちのせめぎあいがある。まず、二泊した感想から述べておきたいが、あそこはルールも権威性も差別性も他の集団とは比べ物にならないほど皆無であった。にもかかわらず、自由と公共性をともに、学生自らの手で円滑に運営されている非常なるレアケースの集団であった。寮生の多くと接触したが、驚くべきことに京大生ではない人間も多く存在した。その中で最古参風の人間に話を聞いたところ、

「吉田寮は古代ギリシャの理想的国家である。ここは本来特殊ではない。本来はここが普通であるべきなのだ。権威性 FUCKー」と言うから「はい」が『ポリス』ですか」

と聞いたところすぐさま「そうだ！」と即答された。また、彼は続けて「勿論ここには『奴隷』はいないよ」とウィンクした。寮生全体の雰囲気を含括すると、とかくアナーキズムかくあらんというものだ。

熊野寮にも行った。そこは中核派の勢力圏だと聞いていたから、熊野寮を京大生に案内してもらった際に、中核派に興味があると言うと、彼は笑って、自分は中核派だと述べた。私が一応、中核派の行動についての理解を示したところ、ではアジトに招待しますと彼はいった。アジトというので私はいささか興奮を隠せなかった案内されたのは熊野寮のある一角。そこに京大中核派のアジトがあった。鋼鉄製の分厚い扉があり、さながら戦時中の地下壕のようなところで、「なるほど、ここが所謂革命戦士の司令部か」と私は感じ入った。内部には中核の旗とおそらく中核派の創立者の写真が大仰に飾られていた。

吉田と熊野を相対化してみたときに、(こういった抽象的な営みをするには無理がありそうだが) 吉田寮は権威性のことごとくをつまらないものと捉えて自分たちには関係の無いものと位置づけているようであった。権力の全てに反抗とまではいえぬが、権力との接触を断ち、個人が自由に行動している。吉田寮に泊まっている IT 企業の社長が言うには「ここはルールが無いから、もし

も怒られたときは、それが人間としてやってはいけないことをしているときだ」と。確かにそのとおりであった。しかし同時に少し不思議に思ったのが、権威性は確かに唾棄すべきものではあるがそれに不関でいられるかと言うことである。かれらが突出して権力構図と無関係の装いでいられるのは権力を背景とする普遍たる社会の中に特殊としてあるからである。彼らを支援し保護したい人間は保養地のように吉田寮を位置づけている。つまり、いわばポリス的吉田寮には社会という奴隷があつたのである。熊野寮は（というか中核派は）社会の改革や社会主義革命に思想が向いているようであつた。労働者たる自分たちが政権を握り、労働者本位の社会を形成するというものである。そこに暴力的革命を持つてくるかどうかはまた議論の分かれるところではあるが。

ともかく彼らは共に、社会に対する実践的行為者・挑戦者であり、そこについて賞賛すべきなものには私は疑いを持つていない。大衆化・均一化し個人を見出せない息苦しい社会になっている中で彼らの特殊行動はもはや政治とも芸術とも取れる。最後に彼らの行動を讃えてここに先に述べたガウデアームス寮の名前の由来である学生歌の一節を掲載し、筆をおきたい。

学生歌 ガウデアームス

諸君、大いに楽しむうではないか。
私たちが若いうちに。

素晴らしい青春が過ぎた後、
苦難に満ちた老後の過ぎた後、
私たちはこの大地に帰するのだから！

筆者追記 京大の憲法学の講演にも参加し、その後学生たちや教授と議論もした。その中で法学はその専門上、法の解釈や裁判の判例を反証することはできても、法の反証自体はできないと考えた。法自体を反証するにはより高次のメタ概念が必要になるのである。この発見は私にとつて目から鱗であつた。これによつて私は今取り組んでいる西洋哲学についての関心が高まつた。

定有堂教室「読む会」 毎月一回 いずれかの火曜日

次回 一月二十九日（火曜日）

テキスト 神島裕子『正義とは何か―現代政治哲学の6つの視点』中公新書 2018

十一月三日は武道の日



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

十一月三日、姫路市にある兵庫県立武道館では文化の日というよりも武道の日であった。毎年、この日には「兵庫県武道祭」が開催され、今年は十七回目である。日本武道の演武発表と体験教室が主であるが、茶道体験、生け花展示、書や絵画、写真等の展示のほか、地元でとれた農産物の販売などもあり、文武の日と言えるイベントとなっている。私は過去に一度行ったことがあるが、日ごろから武道の稽古をしている人達にとっては、年に一度の楽しみな日であることに違いない。

今年には県政百五十周年記念事業が県内で行われているが、国レベルでは「日本におけるロシア年」としてロシアとの交流事業が国内各地で行われている。兵庫県はハバロフスク地方と友好提携しているので、今年の武道祭にはロシアからの武道代表団が特別参加することになった。

た。

二十年以上前にロシアに住んでいた頃、サッカースタジアムがにぎわっていたことは覚えているが、武術には全く関心がなかったのだ。スポーツ競技種目として「サンボ」という名称を聞いたことがある程度だ。それよりもむしろ、日本の柔道や合気道をしているロシア人に興味があった。

今回、ロシア武術代表団によって披露されたのは、サンボ、ブリヤート弓術、コサック武術、タタルスタンのコレシユ、ヤクート語で木の棒を意味するマスを使ったレスリング、ヤクートの格闘技ハプサガイ、アムール地方には少数民族が自然の中で伝統的に作ってきた格闘技があり、ブリヤートのブヘ・バリルダンはブーツと腰の帯であるまわしが着用される。当日のプログラムからこれら八種目の名称を挙げたが、私自身、今まで全く耳にしたこともなく、目にするのも初めてなものばかりだ。ロシア武術団と言っても多民族国家であることを象徴するような、それぞれ興味深い演武であった。

レスリングは男たちによる一対一の格闘技であっただろう。中央に民族衣装を着た貫禄のある男性が現れ、こ

れから勝負をする二人はその人物に敬意を表し、儀礼的な動きをする。相撲の行司と同じだと気づいたが、審判役というよりは自分たちの民族の長老であり、きつと彼も若い頃は強くて皆のあこがれだったのだろうと思えた。華やかなロングドレスの民族衣装を身につけた、タタルスタンの美女二人が登場すると、思わず、この女性をめぐっての闘いになるのかと思われたが、武器を手渡す役目だった。海外で見せるにはショー的な要素も必要だと思われたのか、彼女たちの存在は実際のところわからない。

コサックの美女も深紅の民族衣装で現れたが、こちらは両手に剣を持ち、身体のそばで自由自在に振り回していた。コサックダンスはロシアで実際に見る機会もあり気に入っていたが、コサック武術を見たのは初めて。期待していた武器を持つてのダンスではなかったが、躍動感のある生死をかけた戦いをも想像させるもので、剣術のキレは鋭かった。コサック騎兵で有名なだけあって、他の民族よりも誇り高い感じを受けた。かつてウラジオストツクで出会ったコサックの女性も誇り高く、「私たちはロシア人よりも日本人に通じる精神を持っている」と言っていた。

一連の表演の後は、一般参加の体験の時間があり、試してみたい武術のところに行ける。通訳の人の助けもあったが、身体と身体、言葉なしで技のかけ方を教わったり、武器を持たせてもらったり、見様見真似と手取り足取りで、皆が楽しめた。特に子供たちは、外国人に実際に触れて、外国のお菓子をもらって大満足の様子だった。ベトナム人のグループも自国の武道と似ているのか積極的に次々と試していた。同じ東洋人であっても日本人ではない、とすぐに見分けたロシア人はさすがだ。身体の使用方が民族によって違うところもあるのだろう。要領よくすべての武術を体験できた人もいるし、遠慮がちな私は、たまたま隣にいたサンボの選手に教えてもらって、初めて男の人を床に投げた。こんなに気持ちのいいものなんだ……

身体を使って交流し、驚きの声が上がリ、笑顔ばかりで、あつという間の一時間であった。

『音信不通』の紙面には「定有堂二階にて、一緒に太極拳、やりませんか」とのお誘いがある。武術太極拳は日本の武道には入っていないが、武道祭でも模範演武でその美しく力強い演武が披露されていた。武術でありながら、健康増進のための養生術でもあるから、皆さん、どうぞご参加を！

鳥取あれこれ その二十八

内田克彦

(地域研究家)

(承前)

一九二七(昭和二)年、東京での婦人参政権運動から離れて京都に移った碧川かたは、どのように過ごしていたのだろう。『日本女性運動資料集成第2巻』の中の、婦選獲得同盟の機関誌『婦選』から転載された次の一文を見つけた。「九州、中国、関西、四国婦選行脚」と題した、一九三〇年一二月の市川房枝、河崎なつ、坂本真琴、金子しげりの連名による記事の中の、坂本が書いた記事である。

旧友碧川氏が訪ねてくれて、娘さんをすぐに会員にしてくれたのも嬉しかった。

「加茂川べりのながめ美しい教育会館の楼上」で開かれた講演会に、お互いに連絡を取り合っていたのか又何かで知ったのか、かたが駆けつけている。現時点での同時代の資料は、これしか見つけていない。

一九三四(昭和九)年四月一二日、企救男が京都で亡く

なった後、道夫の転勤で、京都から再び東京に戻った。かたはどの団体に所属して運動したのだろうか。

児玉勝子著『十六年の春秋―婦選獲得同盟の歩み』に、次の記述がある。「第七〇通常議会(一九三六年一月二四日～三七年三月三十一日)」の項である。

婦人参政権に関する請願が、婦人参政同盟の碧川かたらによって提出され、一九三六(昭和一一)「ママ」、「一九三七(昭和一二)」の間違い」年三月二四日の衆議院請願委員会で採択された。

かたは、「婦人参政同盟」に復帰したのだろうか。因みに、ネットで「官報號外 昭和十二年三月三十日 衆議院議事速記録第三十四號」を見ると、「婦人ニ参政権附與ノ請願 東京市世田谷區松原町一丁目三十七番地碧川かた外四十一名呈出(紹介議員山杣儀重君)」と出ているが、所属団体名は記載されていない。

さらに、同じ児玉勝子著の『婦人参政権運動小史』の「婦人参政同盟―一九二三(大正十二)年創立」の項には、次のように記述されている。

一時会員であった河本亀子は婦人保護協会を作り、西川文子の真新婦人会(ママ)、碧川かたの婦人禁酒会と

結んで「婦人参政三派連合」を組織して参政同盟とは別個に運動を始めるかと思うと、西川文子は隠退して、母性保護協会の小牧末子がこれに加わり、「三派」は昭和二年一月ごろまでは存在したが、その後解散し、碧川かたは参政同盟に入り、小牧末子は山根菊子の「女子参政権協会」に入った。

「婦人参政同盟」に本来に復帰したのか疑問を持ったままであつたが、先日、角秋勝治さんの『碧川かたとその時代 下』を見ていたら、一九三九（昭和十四）年二月の衆議院議長に宛てた「刑法改正ニ関スル請願」の下書き写真が載っており、それには「請願者 婦人参政同盟 碧川カタ子」と記載されていた。これにより、児玉勝子の記述が裏付けられた。

しかしながら、婦人参政同盟の理事として、設立以来中心的な存在であり、かたとも親しかった高橋千代は、一九三三（昭和八）年八月に除名されているのである。女性参政権運動は、婦人参政同盟より後に設立された婦人参政権獲得期成同盟会（後に「婦選獲得同盟」と改称）が主流となっており、しかも高橋のいない婦人参政同盟に復帰したのは、どういうわけだったのだろうか。

なお、婦人参政同盟は、一九四〇（昭和一五）年九月一二日に解散している。

高橋千代は、（公財）山口県ひとづくり財団の「山口県の先人たち」のHPに「女性参政権獲得と女性弁護士への道を拓いた」と紹介されているとおり、また、前述の児玉著で「参政同盟の運動の成果として、婦人弁護士制度制定一弁護士法改正運動と、明治大学女子部開設に蔭の力があつた」と記されているように、弁護士法改正を、婦人参政同盟の中心となって運動した人物である。

かたも、設立間もない頃の婦人参政同盟で、高橋と一緒に運動していたことは、安部宙之介著「露風の『赤とんぼ』の母」への次の記載によつてわかる。

婦人参政の道を開くには、婦人弁護士をつくることが必要だとて、明大木下総長に頼みこんで女子の聴講を許させて、かた子は若い人を勧誘して共に明大法科の聴講生となるなど実行が早かった。

日本で最初の女性弁護士、中田正子につながっていく私たちの弁護士法改正運動について、更に調べてみたい。

（この項、了）

天平の詩魂 (下)

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

0

「世の中を、何に喩へむ、朝開き 漕ぎ去にし船の跡
なき如し」筑紫歌壇を代表する沙弥満誓の歌。億良、父
旅人・叔母坂上郎女の他にもかう云ったビッグネームの
鎬を削って居た往事、大宰府と云ふ土地は大陸を睨み様々
な情報、文化そして勿論人の行き交ふ日本一の國際都市、
宛ら後年の長崎のやうな活気溢るゝ町だった。多感な少
年期を此処に過した家持に大志を抱かせ、左遷された筈
の旅人にも都に勝るとも劣らない、刺激的な文化的環境
で在ったか。

I

「橘は、常花にもが、ほととぎす 住むと来鳴かば 聞
かぬ日なけむ」父に書をもて！と名付けられた弟大伴書
持の歌。彼も亦一族の、期待を担った一人であつたが、
未だ30代半ばで逝つて了つた…。

II

「言問わぬ、樹にはありとも うるはしき、君が手馴れ
の、琴にしあるべし」楽器をかう詠んだ詩人旅人。気高
く志高くしかし政治的に時の権力者に疎まれ左遷され旅
の空の下愛妻に逝かれ世を嘆いてゐた、彼には酒の歌が
多い。なんとも牧水のやうな人だな…さう思つて読んで
ゆく内↓否逆だなあ牧水こそ、このノーブルなデカダン
貴人の影響下、ああいふ漂泊の人生を送つたのだなあ…
と。歌人若山が萬葉を識らぬ訳が無い。意識して彼は旅
人を気取り、現代の李白たらんとその気概を持つてあのス
タイルを打ち立てたと考へるのが自然だらう。後年の日
本文学に筑紫歌壇の与へた影響は絶大である。彼ら無し
に蕪村、芭蕉、一茶、啄木、晶子・と云つた系譜の成り
立つたであらうか？

III

本来家持は、身分高くない妾の産んだ庶子。その儘氣樂で自由に生きてゆけたなら？激動の時代、政治の中樞近く在っても亦違ふ人生もあつたらう、後年の光る君の如く。しかし、父の正室に男子の無かつた為に、名門の嗣子として「家」をもて生きゆく、一族の長としての生涯を宿命付けられた。そんな彼に戯曲では、モノローグと云ふ形でハムレットさながらに呟やかせてみた：紀貫之然り、「文学」は負け組の者達によつて連綿と紡がれ遺されて行く。

IV

運命の悪戯は、更に難波に彼を送りそこで膨大な防人の歌を知らさるゝ事となる。東歌も併せ多くの無名の庶民達の涙や歎息を知り、其の詩魂と出会ひそこから選び託されたものに未だ萬世には遠く及ばないけれど千年を悠に超ゆる平成の世に声を届けた、此が政治的勝ち組の藤原の某やら橘何麻呂と云った人間だったら、純粹に芸術的な視座から時代の秀歌を撰びアンソロジーとして後世に遺し、旧約聖書やコーラン、仏典等数々の名詩篇編集者に比肩する東洋の古典の著者には成り得なかつただらう、到底。因幡国府の辺境に在って、決して志を揺

るがす事無く、静かに萬世のすへを見据へてゐた家持、夢と情熱が眞に花開くのは未だ遙か先の事かもしれない。では文末まう一首に訊きつゝペンを置かう、「水泡なす、仮れる身そとは、知れども……なほし願ひつ千年の命を」家持……

8

2018. 11. 2

「今回の一枚」

A.ドゥヴオルジャーク スラヴ舞曲集 第1集Op.46

B83 第2集Op.72 B147 V.ターリツヒ指揮チェロ・

フィルハーモニー Rec. 1950

画. A. T



旅とめがねと芋煮

あきの素生

(くうねるめがね)



(前号からのつづき)

車窓の景色を満喫し、4時間超、列車に揺られた疲れなどみじんも感じず益田駅に降り立った。島根県立石見美術館までは、徒歩15分程度。陽気もよく、てくりてくりと歩いて向かった。

お目当ての展示「めがねと旅する美術」には、めがねはもちろん、「視覚」や「視点」をテーマにした、あらゆるジャンルの美術作品が集められていた。柄付きの「ローネット」や鼻に挟んで使う「パンスヌ」といったアンティークめがね。文豪や建築家が、そのめがね越しに見ていただろう光景を写した作品。3Dめがねをかけて入る小部屋。鳥瞰図、人工衛星が撮影した地表の映像、架空の都市の詳細地図。

科学技術を取り入れた作品もあり、VRを体験することができた。ヘッドセット(ゴーグル)のついたヘルメツ

トみたいなの、でもなんというか、もつとこう、メカメカしい装置だ」をかぶり、手の甲にセンサー、胴体にバックパック型のマシンを装着。これだけで「おお未来っばい」と気持ちが盛り上がる。有り体にいえば、会場の一角をぐるぐる回っていただけだったのだが、高所にある通路を直進している感覚に違和感 wasn't なかった。視覚、御しやすい奴。にもかかわらず、視覚に対する身体感覚の信頼は絶大なものだ。

「めがね」は自分と「世界」の間に入り、視覚でもって両者をつなぐ。そこに見えるのは、明瞭だったり、微細だったり、宇宙の果てにあつたり、架空だったりする、或る「世界」の姿だ。いろんなものを見てみたくて、最新の学問やテクノロジーを、その時々「めがね」に注ぎ込んできたのだな、と感じた。

プロダクトとしてのめがねの魅力、「見ること」にまつわるあれやこれやに思いを巡らせながら、美術館を後にした。

せっかく益田までやって来たので、津和野まで足を伸ばすことにした。何年も前に一度訪れたことがあるが、風情ある街並みと立派な鯉たちが印象に残っている。のんびり散策して、干し梅以外のおいしいものが食べたい。街歩き用の地図や飲食店の情報を駅横の観光案内所で

手に入れて、何を食べるか(何を見るのかももちろん)考える。やっぱり土地のものが食べたいなあと思い、郷土料理のお店に入った。

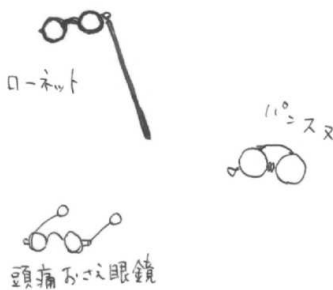
店内の「本日のおすすめ」ボードには、手羽先のからあげや茄子と豚肉のはさみ揚げなど、ここでなくても食べられるけれど、どうにも心惹かれる品々が書かれていて、郷土料理を食べるという気持ちで簡単に揺らいだ。しかしそこはぐつと堪え、津和野の名物をメインに据えた定食の中から「うずめ飯定食」を選んだ。うずめ飯、刺身こんにやく、小鉢2つ、茶わん蒸し、お味噌汁と充分お腹が満たされるであろう内容だったが、ぱらぱらめくっていたお品書きの中に「芋煮」を見つけた。11月頃から食べられるとある。少し早いけど、先ほどの「本日のおすすめ」ボードにも「芋煮」の文字が。これはぜひとも食さねばと思い、こちらも注文した。

うずめ飯定食は、ちよつと驚くくらい美味だった。うずめ飯を食べたのは初めてだ。お茶漬けのような見た目だが、ごはんの下からどんどん具が出てきて、塩味の効いた熱い出汁を吹き冷ましながらか、お匙でぱくぱくいただく。刺身こんにやくはひんやりとしていて、口の中がほつとする。

そして芋煮。ひと口で、前に食べたことがあると気づいた。ほぐした鯛の身、とろりとした鯛の出汁、柚子の香

り。里芋は粘りがありながらもほつくりとしている。忘れられない、というか忘れていたけれど、舌は覚えていた。公園でみんなに振る舞われていたんだ。その光景まで鮮やかによみがえった。前回来たのも秋だったんだな。味覚、悔りがたし。

満腹以上に満たされて、観光スポットをいくつかまわり、最後に津和野城跡に登った。リフトから降りて、歩くこと20分。ガイドブックに書かれていた「箱庭のような津和野の街並み」が見えた。めがねと鉄道の旅は、この鳥瞰をもつて終わった。



(イラスト:あきの素生)

魂の叫

土質 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

書かねばならない、と急ぎ立てる体験ではないのだが、どこかに書き留めておきたいようにも思うので、この場をお借りする。

高齢の両親を博多に訪ねる際の無為の日々、に関するナンセンスについては性懲りも無く、過去何回か繰り返して書いた。仕事はやや沈静化する十一月初旬に一週間ほど、というのが恒例であったが、今回は状況がやや逼迫し、九月の七日からやはり一週間の予定で来たものの、結局ふた月近くの滞在を余儀なくされた。

「高齢の両親」の内訳は父八十九歳、母八十六歳。

僕はひとりっ子で、自分らの老後は自分で担保するの で心配するな、という父の言葉を鵜呑みにしていたが、そこには相互に(薄々感じる疑念があったにも関わらず、「禁句」としていた)希望的欺瞞があったことが今回一 気に(「破綻」、といったものは、従来必ずそうである

ように)露呈した。

「自分らの老後は自分で担保する」という設計には介護制度を利用しつつ、などといった思惑があったに違いないが、今回は帰国早々、「ケアマネ」とか「訪看」といった人達が待ち構えており、泊まっているホテルまで来て「ご両親がおふたりで自律生活されているのはもう限界」、と直訴される僕は、そういう状況の到来の確実性を熟知しながら(気付かぬ振りして)看過していた人非人の感を免れない。

日本の介護制度については、全く知見が無かったものの、少しずつ咀嚼しながら(年寄りの世話をしていると、まるで自分が若いような錯覚に陥り、無理をしがちだということが今回よく分かった。しかし、不案内な制度を理解しなければならなかったり、諸々の手続きで駆けずり回ったりしていると、若返り感が、親の認知と同等に譫妄であることを、たちまち自覚する。自分自身の知力や体力もどっぷり衰退期に入っているのだと……)ケアマネジャー、医師、訪問看護師、介護設備業者、ヘルパー、といった関係者間での緻密な連携は、あらゆる面でアウトなアメリカでは絶対無理だな、と感心する。よく練られた、素晴らしい制度だ。と同時に、被介護者に重度

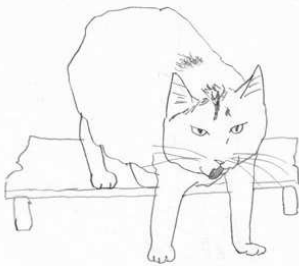
等の変化がある度に開催される担当者会議、といったようなものを垣間見ると、寄つてたかつて年寄りを喰いものにしていくように見えないこともない。それは僕の偏見に基づく印象に過ぎず、現場の方々は天使の仕事をしている。六十五歳以上が人口の四分の一を占める日本では、需要に基づき介護業務が必要であることは明白であるが、負の印象を払拭できないのは、そのビジネス・ニーズの建設性の欠如であるような気がする。大量の物資を高速で遠距離に移動させたい、には、胡散臭さの入り込む余地はないが、介護ビジネスは、要らなくなった人々を生きさらばえさせる仕組の構築、という歪んだ見方ができてしまう。

ひょっとしたら僕達は、ストレートなビジネス・ニーズは人間以外がこなしてしまう遠くない未来に備え、人間は自分達が生きさらばえていくことだけに専念する日々を、いや、少しだけ期待を込めて大江風に云うなら、「魂のこと」に専念する日々を、介護業務を通じて幻視しているのかもしれない。

母の病状の急変の報で帰国し、ふたりの自律生活の限界を見極め、ケア付きマンションを探し、入居させ、転居に伴う事務手続きを完了する、という作業を完遂した七週間は、これまでの人生で、真にひとつのことに没頭

した時間であつたように感じる。親の終焉に向けての作業であるが、悲嘆や不安を感じる余裕も無く、本を読もうとか、文章を書くとかとも思えない。まるで己というものが洗い落とされたような、不思議な体験であつた。

“It takes a village.” という言い方がある。元はアフリカの諺らしい。村中の力を持つてせねば成らぬことを云うときに使う。例え魂のことだけをやるようになって、生の終結は累々と引き継がれていく。いや、生きさらばえて、魂のことだけをすることが人間の営為となつたときにこそ、村中が、寄つてたかつて、誰もが終りまで魂のことをし続けられるよう見守る。そういうことを日本人は介護を通じて練習しているのではないのだろうか。



熊のはなし



ドラメリア

(座敷わらし)

最近、ときどき早朝に山に行く。山頂から明るくなつていく空を眺めるのが楽しいし、霧のかからない晴れた日は遠くに大山が見える。

しかし、登り口に立つ「熊注意」の看板が実に怖い。牙を剥き出して今にも襲ってきそうな熊のイラストが描かれていて、迫力十分だ。

わたしの実家は山のそばで、五十歩走れば山に飛び込める近さだったので、時々熊の話を目にした。実物を見ることはないが、山菜を採りに入った山道で痕跡を目にすることはあるので、まあいるよな熊、という認識だったと思う。

そんな地域で熊騒ぎが起きたことが一度ある。「林のおばちゃんだと思ったら熊だった事件」。説明の必要もないそのまんまな事件で、家の軒下でこそそこそそしている後ろ姿を林のおばちゃんだと思ったら、なんと熊だったという。ここまで近くに出没したのは初めてだったので、当時、ニュースは「林のおばちゃん」というキーワードとともに地区中を駆け巡った。

……林のおばちゃんの名誉のために補足しておく、

決しておばちゃんは熊っぽいわけではなかった。上背のあるがっしりした体格ではあるが、いつもピンク色の割烹着を着ていて、普段なら当然見間違えたりはしない。ただ、目撃された時間帯が夕暮れどきで、薄暗がりの中では判別が難しかったのと、軒下に吊るした野菜を漁る姿に精を出すおばちゃんの姿が重なってしまったのだらう。

東京での研修の際に田舎エピソードとして披露したら「まさか、そんなことあるわけないよ」と信じてもらえなかったが、本当の話。当の熊は逃げ去って、以後姿を現していないらしい。



・編集後記……

山といっても舗装路なので、お散歩気分で行けるのも魅力。もう時季も終わりですが、紅葉が綺麗でした。雪が降る前にあきさんと行きたいな。

ドラメリア (編集長)

うしきのどかさんが、大学の購買部(ダンクショップ)の一角を借りて、「三週間書店」を実施。12／3／21 雑誌「Hanako」(ハナコ) 一月号に本の紹介を二点(一六五頁)。12／20 発売の「天然生活」に、本の紹介を八点しています。冬に読む本企画。

奈良敏行 (発行人)